

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	何人カ速ニ九州論ヲ草シ來ル : 論説
Author(s)	福井, 彦次郎
Citation	龍南會雜誌, 27: 1-4
Issue date	1894-05-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4395
Right	

龍南會雜誌第貳拾七號

論說

何人カ速ニ九州論ヲ草シ來ル

教授 福井彦次郎

予輩ノ九州論ヲ切望スルヤ久シ、熊城ノ近況學校ニ新聞社ニ見セ物ニ、一事業起ル毎ニ、其名稱ヲ聞ケバ曰『九州何々』曰『九州何々』、而モ未ダ九州論トモ覺シキモノヲ見聞セズ、甚ダ憾ムベシ。

五嶋ト壹岐トノ面積ヲ比較セン乎、前者ノ後者ニ勝ルハ宛ラ讀ミテ字ノ如ク一見明白ナリ。其ノ此レハ儼然一國ヲ以テ稱セラレ、彼ハ海面ノ一僻隅視セラル、ハ何ゾヤ、將又對島ノ二韓ニ近ク九州ニ遠キニ拘ラズ、我王土ニ歸シタル事情ハ如何、先人ノ盡忠想フニ余リアルニ非ズヤ。何故ニ輕舟一棹其餘力ヲ以テ濟州嶋ニ漕ギ附ケザリシヤ。予輩該島民ト我九州人トノ漁業紛議ヲ聞ク都度、未ダ曾テ先人ニ今一層ノ盡忠ヲ望マズンハアラス。

這般ノ感慨ハ暫ク措キ、海天空濶東ノ方天草洋ヲ渡レバ、未ダ彼ノ古史ニ名アル坊津ニ達セザル中ニ、早クモ一孤島ヲ認ム、之ヲ甌嶋トス。諸子ハ該島ニ關シテ何等ノ近況ヲ聞知シ居レリヤ。

更ニ東行スレバ忽チ薩摩富士ヲ見ル、此邊薩南ニ遊歴シタル人々ハ、忘レントシテ忘ル、能ハザル一異觀アリ、男ノ逸シ女ノ勞スル是ナリ。沖繩途上大島ニハ恐ク同一ノ舊習アルベク、更ニ迺カ東シテ豆海ノ大嶋ニハ何カ類例ハナキカ。其ノ女服ハ薩南女兒ノ様式ト一般ナリト聞ケリ。諸子須ク想起スベシ、海門山下ノ女兒居常身ニ裾摸樣ノ婚禮服ヲ着ケ、魚籠ヲ肩ニシテ平氣ニ行商スル傍ラニ、男子

ハ綠陰ノ下芋焼酎ニ酔臥シツ、アルナ。豈亦一奇觀ニ非ズヤ。山陽翁口吟ステク、

薩南村女可憐生、竹策芒鞋趁新晴、花下載薪皆牝馬、一人能領數馱行、

女子ノ可憐生ハ寧ロ忍ビテ可ナリ。更ニ東スルノ幾千里、路機山下ノ異俗、妻ハ腰打掛テ足ヲ差出シ、夫ハ恭シク之ニ靴ヲ穿カセテ得々然タリ。男子モ此ニ至テ可憐亦甚シ、豈唯一奇觀ニシテ止マンヤ。斯ノ奇觀アル隼人種族ニシテ、斯復ノ古大業ニ先鞭ヲ着ケ去ル、九州論者タルモノ再考セズシテ可ナランヤ。

諸子ノ百モ二百モ承知セラル、鹿城へハ立寄ラズ、櫻洲ノ山色ニ接シテハ「アドミラル」キイパル打拂ノ壯舉ヲ想ヒツ、灣頭加治木郷ニ上陸スレバ、程遠ラザル邊ニ噂吹ノ瀑布アリ、「ソウ」トハ「アイヌ」語ニテ瀑布ノ事ナリト聞及ベリ。「アイヌ」學者白野夏雲氏ハ言ヘリ、太古ハ「アイヌ」人此邊ニ住シタルナリト。氏ハ亦言ヘリ、玖麻ノ「クマ」ハ「アイヌ」語ニテ山懷^{フレコ}ノ義ナリト、熊襲ノ「クマ」モ同斷ナリ。是ハ其道ノ専門家ニ讓ルコト、致シ、嶋津伊東二氏隆替ノ由ル所以ヲ考ヘナガラ、都ノ城ヲ通リ日向ニ入ル。

吾人ノ骨髓ニ最モ深ク刻ミ込ミタル觀念ハ抑モ何ナリヤ。其ノ 皇統一系ノ念ニ外ナラザルハ言ハズシテ明カナリ。予輩ハ者フ、苟モ 皇統一系ヲ口ニスル以上ハ、更ニ一步根源ニ溯リ山陵考ニ注意ヲ促スハ史家ノ一職分ニ非ザル歟。蓋シ日向ニハ未詳ノ山陵少カラザルガ如シ、阪府炭友ノ遊歴以來日向開拓談ヲ耳ニスル頻々ナリ。予輩ハ切望ス、此實利的世運ト全時ニ人皇以前ノ山陵考ガ、霧嶋ノ下高千穂ノ邊可愛嶽ノ畔、幾多ノ發明ヲナスニ至ランヲ。藤田諸陵助ハ果シテ何等ノ好土產賈ラサレタルヤ。聞ク豊前地方ニハ女帝塚ト稱スル一壯觀アリト、某神官ハ大ニ望ヲ屬シ居ラル。

大分地方ハ先般諸子ノ遊歴セラレタル處ナレバ、夫々幾多ノ觀察アルナルベシ。予輩ハ別段我見ヲ立テズ、其砌矢津教員ノ耶馬溪談ハ大ニ吾徒ノ耳ヲ新ニシタリ。

人車夢ヲ載セテ轡々忽チ門司ノ新港ニ達ス、矢津氏ハ其新著中ニ門司馬關ノ兩港ヲ一縣治ノ下ニ合併スル利ヲ説カレタリ、九州論者ノ説得テ聞クヲ得ベキカ、豐公ノ豪膽ヲ以テ猶且ツ名護屋ニ本陣ヲ据ヘ、名護屋ヨリ壹岐ヘ、壹岐ヨリ對馬ヘ、對馬ヨリ絶影嶋ヘト、只管陸影ヲ失ハザランコトヲ力メタリキ。今ヤ世局一變シ、火輪一蹶右手ニ浦潮港ヲ畫キツ、左手ノ嶋影ニ差構ナク、釜山ニ元山ニ直航極テ易々ナリ、而モ望蜀ハ人生ノ常情、馬關釜山ノ兩海峽ノ聯絡ニ幾層ノ迅速ヲ欲スルヤ近日別シテ切ナリ。國防上ヨリ見テ、矢津氏ノ一縣治説頗ル趣味ヲ添フルヲ覺ユ。豐公ニシテ此直航ノ快樂ハ夢想ダモセラレザリシ所ナリ、一意九州ヘ渡ラント熱中セラレタレバコソ、中國盡頭一舟子ノ手ニ敢ヘナキ最期ヲ遂グルニ垂ンタリキ。二十世紀海ニ漕ギ入ラントスル、吾人誰カ今昔ノ感ナカランヤ。

唐津ハ特別輸出港ナリ、炭坑ノ近況頗ル盛大ナルガ如シ、其近傍コソ名護屋當年ノ陣所地ナレ。試ニ想ヘ、此石炭以テ佐世保ノ艦隊ヲ運用シ、猿郎ヲシテ黃海ニ突入セシメタラバ如何、一喝何ゾ曹宋家四百州ヲ震動スル位ニ止マランヤ。

佐世保途上、玄海ノ要區平戸嶋ニ一泊セン乎、遺跡遙弔鄭成功ノ感ハ志士一般ノ頭上ニ昇ラントスルハ言ヲ竣タズ、談其近事ニ及ベバ稻垣滿次郎氏ノ一計畫ニ想到スルナルベシ、氏ハ帝國義勇艦隊ヲ此郷地ヨリ始メント志セリ、何等ノ妙案。氏ノ説ニハ全國ニ三十六個所ノ繁泊場ヲ要スルヤニ聞キ取レリ、此中二分一ヲ九州ニ占領スルモノトスレバ、適當ノ良港ハ二三角ヲ首メ何々ナリヤ、古來ニ名ヲ縱マ、ニセル博多港ハ、今日ノ儘ニテハ落選ノ外致方ナカラン、惜ムベシ。嗚呼九州論ヤ難シ、各州ヲ周

遊シタル上ナラデハ出來ズトスレバ彌々難シ。幸ナル哉諸子ハ九州ノ中心ニ常住ス、周遊ニ及バズマテ多少ノ好材料ヲ得ルコト易々タリ、一ニ諸子ノ觀察力如何ニアルノミ。

招魂祭ノ當日、端ナク古希臘ノ「オリンピック、ゲーム」ノ實用ヲ想合ハシタル餘勢ニ任セ、敢テ禿筆ヲ弄スルコト如此、學生諸子ニ對シテハ、固ヨリ九州ノ現況論ヲ求ムル意ニ非ズ、地理ニ歴史ニ之ガ變遷上ヨリ立言アランコト望ムモノナリ、此所ニハ聊カ九州ノ過去ト現在トノ繫目ニ關シテ一節ヲ書キ立テタルナリ、幸ニ諒セヨ。

英佛兩國の革命

十 時 彌

迂回し曲折す、是大勢の進行退歩をんとする觀あるを以、彼の大勢の進行を線線的きもの實は此迂回のればなり、

國民の動作は一朝一夕は轉移すべきものに非ず。蓋し其の源泉は隠れて深山幽谷の中に在り、或は迂回して西に流れ、或は屈折して東へ趨くも、其奔下する大勢は遂に滄海に達せずんば已まず。而して其大勢の馳する所、或は巖石に觸れて細沫を跳ばし、或は斷崖に落ちて飛瀑を懸け、時としては怒濤狂瀾天を排し、時としては細漣微浪岸を洗ふ、或は其進行殆ど全く歇むが如きあり、否、寧ろ全く逆流して其本に歸らんとするが如きあり。然れども、其進むは即ち進むあり。退くが如しと雖も進歩は常に瞬時もやまず。蓋し其進歩たるや、間斷なき進行にあらず、時としては退却的運動、若くば退却的運動らしく見ゆるものを得ず。是れ其進歩は直線的からず、螺旋的なをば也。斯の如き所以は、唯其の潮流を圍める自然の境遇、之に與ふるに特異の性格を以て、之をして進路を迂回せしむるに由るのみ。而して此特異の性格といふものは、正に其時代に於ける思想の満足する所に外ならず。よれば、或特別の時代と他の特別の時代とを對比すれば、其奔流の進向殆んど相類するに係らず、

十人十色の理亦た國家に轉用するを可べし、